令和６年度土砂災害防止　作文　【 土木部長賞 】

「新聞記事を読んで」

香川大学教育学部附属高松中学校　１年　友杉　心美　さん

私は「土砂災害」と聞いて、前に読んだ新聞記事のことを思い出しました。それは、松山市の松山城近くで発生し、木造住宅一棟を巻き込み一家３人が死亡した土砂崩れの記事です。現場を視察した愛媛大のバンダリ・ネトラ・プラカシュ教授は、土砂崩れ現場の地質は水を含みやすい砂岩で、大雨の影響で斜面の表土が崩れる「表層崩壊」が発生したとの見方を示し、連日の大雨で水が集中し、斜面が崩壊したと分析している、と書かれていました。

その記事を読んだときに私は６年前の西日本豪雨のことを思い出しました。２０１８年７月８日の四国新聞に載っていた冠水した岡山県の写真が載っていました。よく見るとその写真には見覚えのある橋が写っていました。まさかと思ってよく見ると、祖父の２階建ての屋根が小さく写っていました。周りは茶色い泥でまるで濁った海のようでした。父が電話をすると命に別状はなく、近くの避難所に避難していると聞いて、ほっとしました。父は１週間仕事を休み、すぐさま祖父のもとに行きました。私も、夏休みに入ったら、すぐに祖父のもとに手伝いに行きました。震災後初めて祖父の家を見ると、壁が茶色くなっていて２階までの階段の最後のところの横の壁のところに茶色い線が入っていて、ここまで水がきたのだと分かりました。私は網戸などを洗いました。実際に洗ってみると汚れは中々落ちず、大変でした。実際に祖父たちが避難所にいる時に私も避難所に行ってみました。避難所ではそれぞれの所に段ボールベッドがありました。避難所での生活はどのようなものだったのかを実際に聞いてみると、食べ物は全国から支援して頂き、毎日三食、食べることができ、毎日お風呂も入ることができ、また、お菓子やペットボトルの水、お茶、スポーツドリンク、ジュースなど、衣類や生活用品などをもらうことができ、何一つ不自由なことはなかったそうです。

災害時の時のことを聞いてみると、その時最初は弱い雨で、徐々に本降りになっていったが、まだ大丈夫だろうと思い、寝ていると近くの工場で突然２回も爆発し、周りの人も避難しており、その時にやっと避難をし始めたそうです。避難をしてから数日後、家に帰ったときは家の中はドロドロで何もかもが入り乱れ、足を踏み入れられる状態ではなかったそうです。しかし、たくさんの人の協力のおかげで無事、今の家まで修復することができたそうです。冠水した家を見ると、もう少し避難が遅かったら、もしかしたら命が危なかったかもしれません。

この経験を機に私は、土砂災害がもし身近で起きたときのことを考えて、土砂災害防止のことについてもっと知るために、危機管理センターの人に、土砂災害防止の

ことについて教えてもらいました。また、たくさんのお話を聞いていく中で、いろいろな知識を、主に２つ知ることができました。

１つ目は、土砂災害の食料のストックの仕方です。ストックの仕方は普段の食品を少し多めに買いおきして、古いものから使い、その分を買い足す、「ローリングストック」という方法が良いらしいです。

２つ目は、土砂災害の危険なことや避難の仕方についてです。なんと、土砂災害の毎年平均１１００件以上の土砂災害が各地で発生していて、令和５年の発生件数は１４７１件だそうです。

土砂災害の前兆現象として地すべり、土石流、がけ崩れなどがあげられます。地鳴り、山鳴り、落石、水位の急変、湧水量の増加、流水の異常な濁りなどこのような現象を見たり、聞いたりしたら早めに避難をすること、危険な場所には近づかないようにすることも大切だと言っていました。

土砂災害から命を守るために、日頃からがけや渓流の付近など、土砂災害によって生命や身体に危害を生じるおそれがあると認められている場所は、土砂災害のハザードマップなどを確認して、自分が住んでいる場所が土砂災害警戒区域などに当てはまるかどうか平時にあらかじめ確認しておくことが大切だとわかりました。

土砂災害発生の危険度が高まった時には土砂災害警戒情報が発表されるため、土砂災害警戒情報が発表されたら速やかに避難をすることが大切だとわかりました。

また、豪雨などでどうしても避難所への避難が困難なときは、次善の策として、近くの頑丈な建物の２階以上に緊急避難したりして、それが難しい場合は家の中でより安全な場所に避難することも自分の命を守るためには大切なことだということもわかりました。

これらのことを学び、私は大きな地震があったときを想定してしっかりと備えていきたいと思いました。